

天地 成行

ケータイ  
記者  
ユーキ君



みんつど出版



プロローグ

ある年の瀬のこと。

山田家のパパの太（ふとし）は、ベランダでたばこをふかす。白い輪っかが一つぽわーんと宙に舞っていた。

「パパ、パパ」一人息子のユーキが問い続ける。

「パパ、どうしたの？ 僕の話聞いてよ」

ぷはー、ぽわーん、またも白い輪っかを太は吐き出した。そしてようやく気付く。

「おー、ユーキ。どうしたかな？」

ユーキは少し不機嫌そうに、でも構ってくれそうでうれしくなる。

「あのね、算数の宿題がわからないんだ。これやらないとママにゲームやったらだ

めと言われているから教えてよ」少し甘えた声で言う。

「しようがないな、せっかくの休みなのに。まあいいや、どれどれ？」

二人がリビングであれこれ算数をしていると、ママの正子が口をはさむ。

「また、パパに宿題を教わっているの？ まったくユーキはパパっ子なんだからあ」

「正子、まあいいじゃあないか。ユーキには友達がいらないから。それよりあの話はあれでいいよな？」

「まあ、いいんじゃない？」

二人は内緒の話をしているようだが、ユーキには分からない。早くゲームがしたいだけなのでこうしている時間も退屈で仕方ない。

太と正子には、これからユーキが待ち構える試練を考える必要があったわけである。それは、あまりにも難題であった。

一月号 新聞か『ロドリゲス』か

「ゴール！」

サッカーの日本対ブラジル戦。後半アディショナルタイム五分三十秒に、ブラジルのフォワード・ロドリゲスが強烈なミドルシュートを放った。0対1になった。あと三十秒。

「いけー、上げれ」

ユーキは興奮して叫んでいた。パスを回してキーパーからディフェンダー、そしてミッドフィルダーの後藤に回った時にゲームを終えるホイッスルが鳴る。

「がーん。また負けたあ」

ゲームのコントローラーを乱暴に放った。かなりいい線いっていたのだから無理もない。ブラジルは強すぎた。

相当興奮していたからか、ユーキはのどがからからになっていた。メガネをふいてから、台所で夕飯のおせち料理を用意しているママの正子に聞く。

「ママ、牛乳ある？」

「あるわよ。冷蔵庫みてごらん。この前スープに使って残りがあるわ。消費期限まだでしょう」

冷蔵庫を開けて、牛乳をコップについで「ごくごく」と飲む。ユーキは小学校五年生のわりには身長が低い。牛乳を飲むことは太からのアドバイスであった。でも、一月は寒いからあまり飲めない。興奮しすぎて今は飲むことができている。

一月もまだ三日、今年は小学六年生になるユーキだが、ゲームばかりしていて勉強も友達もあまり興味がわかない。今はブラジルにどうやったら勝てるか、その一点に興味は集中していた。そして来月発売になるロールプレイングゲームにも興味がわく。

「パパ、ユーキ、晩御飯よー」

ママの声で三人が食卓に集まる。

「パパ、新しいゲームが来月出るんだよ。買ってきてくれないかなあ？」

ユーキの甘えた声にパパの太は諭（さと）すようにいう。

「ユーキ、まあそれもいいけどな、友達と遊ぶこととかも覚えなきゃな。勉強はただ適度でいいけど」

「友達？ そんなのあんまりいないよお」

「あとな、食べ終わったら話があるからコタツでミカンでも食って待ってる」

「なあに？ もしかしてお金くれるの？」

「まあ、この子ったら。早くお雑煮食べなさい！」

ママが突っ込む。

食後、ユーキはコタツへ滑り込んだ。てっきり、パパがゲーム代をくれると思って、うきうきしてミカンを口にほおばった。

そこへパパが何やら持参して部屋からやってきた。

「お待たせ。いいかい？ いきなりで驚くかもだけど、パパな、来月から一人で東京に一年間単身赴任してくることになったんだ。だからママをよろしくな！」

一瞬、時が止まった。

「ええー！ なんてなんで、わけわからない」焦るユーキ。

「プロジェクトに一年呼ばれたんだよ」

「プロジェクトって何だよ。なんで東京なの？ なんて一年なの？」

「本社じゃあないといけない仕事なんだ。集中してやるから一年。すぐ戻るからマ

マをよろしく」

「そんなの嫌だよ、一緒がいいよお」

「ユーキ、そんなこと言わないでパパのお仕事を応援しなきゃ」

大どんでん返した。てっきりゲーム代をもらえと思ったユーキはミカンがまずくなったのかむせていた。

「それでな、これをあげるから使いなさい」と、パパはスマホを差し出した。そして続ける。

「これをもって、遊べと言っているのではないんだよ。やってほしいのは、町内から始めて、家にいないでこれで写真をとって、インタビューして、メールで記事をパパに送りなさい」

「えっ？ 意味がわからないよー。なんだよそれ。ていうか、いやだかね」

ユーキはむすっと、ほおをふくらませる。

「まあそういうな。そうしてな、三人で家族新聞を作るうじゃないか。『山田家新聞』だ。ユーキ、お前はエース記者として任務にあたってくれよ」

「じゃあ、ママはパパが一人でも作れる料理のレシピ担当のコラムをもつわね」



なんだか二人で仕組んでいるウソのようなわけのわからない話になった、とユーキは思った。そしてそれが本当のことになっていくことに少しムカついてきた。その日はわけがわからずにふて寝をした。

パパは本当に東京へ行くようだ。引っ越しの準備をてきぱきすすめて、あつという間に事前研修があるからと旅立った。今月号はパパが作る、と言いつつ残して……。ユーキの手元には新品のケータイだけ。

ケータイの操作は、パパに教わったのもあるが、手際よく覚えた。しかし、使う範囲はパパやママから制限するよう、口すっぱく言われた。しかし、そんなことをお構いなしにユーキはケータイにはまりだす。

ポチポチ……。面白い、とユーキは感じていた。五年一組のクラスでも持っている人はいるが、こんなに面白いものがあつたのかとポチポチしていた。

「最新サッカー選手育成ゲーム、ロドリゲス！ 無料でダウンロードできます」

おお、ブラジルのロドリゲスを初心者から世界のエースストライカーに成長させる最新鋭オンラインゲームを発見した。ユーキはそれがどういふことになるかわからずにダウンロードした。そしてハマってしまう。一緒に住むママの目を盗んで、

部屋で『ロドリゲス』をプレイし続け、わけがわからず、レベルを上げるトレーニングをするために「課金」してしまう。

「ユーキ、ごはんよー」

さっと、ゲームをセーブしてから食卓へ向かうユーキ。

「来月からは取材ちゃんとやんなさいよ」

「はい」ユーキは、うその返事をした。

一月の終わりにパパから、A4サイズで一枚の『山田家新聞』の一月号が届いた。『山田家新聞』という題字が目立つ。トップ記事のタイトルは「パパ太、突如転勤」、縦の見出しで「東京でプロジェクト／来月から『ユーキ記者』」。パパのこやかな顔写真が載っていた。これは去年の十月に公園へピクニックに行ったときの写真だ。記事を見ると、「〇〇年二月一日からパパの太は、東京の研究所での新プロジェクトに召集された。単身赴任で任期は一年。やる気まんまんで、仕事だけでなく、この『山田家新聞』にも学生時代の編集経験で力を入れる方針だ」と一

段落目にある。

ユーキは、続けて読む。

「パパは会社に抜擢（ばってき）された。東京のプロジェクトに四十歳で呼ばれるということは、将来を見据えた意味でも大きい出来事だ。家族には心配をかけるが、このチャンスは逃してはならない。もちろん、家族のことも考えている。家族新聞を毎月責任を持って作成する。記事を書くのは、主に息子のユーキⅡ写真Ⅱに担当してもらおう」

ユーキのほくそ笑んだ写真が添えられている。これは遊園地で撮ったものだ。「ばってきって何？ よくわかんないよ」ユーキは不満そうだ。

そして、紙面の下の方の囲み記事では、「ママ正子の簡単レシピ 次号より」という見出しが踊（おど）る。ママのやはりニコニコした顔写真が載っていた。これは海岸でのもの。

ママは「来月は何を取り上げようかしら？ ユーキ、パパはすごいわよね。さすが、大学時代に新聞部の部長をしていただけのことがあるわ」とうれしそうだった。

ユーキは、「これが新聞か」とA4一枚の「新聞」を見ながらも上(うわ)の空  
で、『ロドリゲス』のことが気にかかっていた。

さて、『山田家新聞』を作ることはなったようだが、ユーキはそのくらいの認識で、何をするわけではなく、三学期も適当に学校で過ごし、家では『ロドリゲス』に隠れてハマっていた。

ママがしびれを切らしたらしい。

「ユーキ、一緒にスーパーマーケット行くわよ。私もネタ拾わなきゃ。さっ、十分に玄関に集合。ケータイもってくるのよ」と部屋に入ってきた。ユーキは、「おっと」とケータイを隠す。「わかったよママ」とユーキはこたえた。

スーパーへは歩いて十五分で着いた。ママは、野菜コーナーへ向かう。

「さーさー、今年の冬は暖かいから芽キャベツがふんだんでお安いでえす。今日は、レンジでチンして塩と炒（いた）めるだけの調理法をご紹介しますあす」

おねえさんが、手際よく調理する。ママをはじめ、お客さんが群がる。ママは、今月号はこれに決めたらしい。うんうん、と調理された芽キャベツをほおばりうなずいていた。ユーキはネタがあれば考えるけど、といった風だったがまったく収穫

がなく帰宅した。

帰り道。ママがふと思い出したように西の方を向いてユーキにいう。

「そういえば、市内に大きなタワーを工事中なのよ。あ、あれ。なんか建っているでしょ？あれ取材してきたら？」

「いやあ、何したらいいのかわかんないし、いいよお」

「もう、ネタがなきゃパパもユーキをどやすかもよ。あなたはエース記者なのよ」  
なんていう会話をしながら、『山田家新聞』の記者部隊は帰宅した。

数日後、ケータイの請求書が正子に届いた。

「四万八千円！ なにこれ」

リビングからママの声がした。スリッパでバタバタとママがダッシュしてくる。

ママがこんなに足音をさせるなんて珍しいな、とユーキは思った。

「こら、ユーキ」

抜きうちで入室されたユーキは『ロドリゲス』をプレイしていた。

「あんた、先月からケータイで何やってんの？ 請求が五万円近くも来たわよ。も

うパパに話して取り上げてもらうから。とりあえず貸しなさい。それで何してたの  
か言いなさい！ でないとごはん抜きよ！」とぶんぶんのママ。

ユーキはママの真つ赤な怒りの顔とその頭から蒸気が見えビビって、泣きそうに  
なりながらすべて打ち明けた。

「課金することがわからなかったの？ ばかね、だからパパとママがいう事以外に  
は使わないって言ったじゃない？ 本当ばか！ もう新聞も終わりね」

ママは部屋を離れて、東京で仕事中の太に急いで電話して、しばらく話し込ん  
だ。数十分後に納得いかない顔でユーキの部屋へ来てケータイをユーキに差し出  
す。

「ほら、私は許せないけど、パパが至急に工事中のタワーを取材してきたらごはん  
をあげて許してやってくれたって。どうする？」

ケータイをちらつかせるママにユーキは泣きながら、「行くよお。許してくださいさ  
い。ごめんなさい」とビビった震える声でこたえた。

寒空の中、ユーキは西へと歩いた。タワーの方へ、ケータイを持って。でも何を  
どうしたらいいのかわけがわからないまま、「ごはん」のためにタワーへ向かっ

た。

一時間以上歩いて現場につく。上着の上にさらに上着を着ているので、体から汗が噴出した。メガネもくもった。工事は終わりがけのようだった。てっぺんだけがまだ整っていないかった。それにしても高い。百メートル以上はあるだろうか、とユーキは高さを知りたくなった。これさえ知ればごはんにありつけると考えた。周りには工事中の大きな囲いがあって、中には入れない。

まず、写真を撮ることにしよう、とユーキはカメラ機能で数枚パシャリとタワーを見上げて撮った。その後で囲いの裏口へ回ってみた。出入口があり、誰かに話を聞こうと待った。その間、ユーキはさきほどかいた汗が、ひんやりしてきたのを覚えた。

工事関係者らしい、ヘルメットをかぶったおじさんが数人出てきた。設計図を持っていて一番偉い感じの人に目を合わせて思い切った話をぶつけた。

「すみませえん、このタワーはいつ完成するんですか？」

するとそのおじさんが、「もう来月には完成するけど、君だあれ？」と逆に取材されてしまう。



ユーキはびびりながらも、引き下がれない。

「ケータイ記者ユーキです。このタワーのことについて取材に来ました」

「ケータイ記者？ なんだいそれは。まあいいや。ここまで来るのに苦労したけどね。ほかに聞きたいことはあるかな？」

「高さは何メートルですか？ 一番苦労したことは何ですか？ それからそれから、えー……」

「高さは、百五十八メートル。苦労したのは、○△×の○×△が□○×したところだね」

工事用語らしい言葉で、高さ以外覚えられない。

「君、私の名刺をあげよう。じゃあ何かあったら連絡して。ちょっと急いでいるんでね、ケータイ記者殿、えへへ」

「あ、ありがとうございます」

ユーキも名刺を手に、逃げるようにその場を立ち去った。タケル建設の部長さんだった。スカイタワー責任者と書いてあった。知らないおじさんに話しかけ取材し

てみせたじゃん、ユーキはそう自分を勇気づけて帰宅した。

しかし、いざ記事を書くこうにも書けない。「三の国市の新名所のスカイタワーが来月完成する。高さは百五十八メートル。工事関係者のタケル建設の不動公康（きみやす）部長は『ここまで来るのに苦労した。あと少しだ』と話した」とだけ書いて、写真と一緒に太にメールした。

パパは、その短い記事とピンボケの写真を見て、「初めてだし仕方ないか。名前は間違えないように確認しろよ。名刺もらったか？ 名刺はもらっておけ。固有名詞と数字は間違えやすいから要注意だ。まあよくやった。ごはんは食べたか？ 来月号に期待する」と返事が来た。

「名刺はもらったよ。パパありがとう。ごはん食べた。もう『ロドリゲス』しないから許して。これも記事にした方がいいの？」

ユーキは、居所なくママの料理を食べて、太にまたメールした。

パパがすぐに返信してきた。

「『ロドリゲス』の一件は書かなくていい。反省しているならそれを次号以降に生かそうな。わかればいい。記事に全部しなくていいんだよ」

ユーキはその晩メソメソしてから寝た。

月末に二月号が届いた。トップ記事は、パパの東京での仕事ぶりについてだった。スカイタワーの話は、最後に修正されて掲載された。

ママの料理コラムは、やはり芽キャベツの炒め物だった。芽キャベツはユーキは、確認していなかったが、キャベツを小型化したようなもので、よくシチューなんかに使いたい。その芽キャベツをレンジで一、二分チンしてから、炒めて食べるというコラム。正子は手軽さから決めたようだった。パパが実際料理した写真が載っていた。

紙面の出来上がりを見て、ユーキは自分のふがいなさを思い知らされた。でもトップ記事を書くのは無理だ、とも感じていた。ただ、勇気をもって、人に話しかけることや、わからないことはわかるまで聞くこと、名前や数字は確認すること、ピンボケ写真は撮らないことを学んだ。そして、いけないことをするとごはん抜きになってしまうことも……。

二月号のトップ記事は、「パパ、新生活に順応／ケータイ記者も始動」という縦

見出しで始まる。「二月から、太の本格的な単身赴任が始まった。概（おおむ）ね順調だ。三の国市に残してきた家族のことを思い出し少しさびしいが、プロジェクトも始動し、東京での新生活にも慣れてきた。掃除洗濯はつらいけど、しっかりアイロンもかけている。またケータイ記者ユーキもデビューし、記者の難しさを学び始めた」

三月に入ったというのにまだ肌寒い日が続く。暖冬だとは言われていたが、この分だと、桜も一、二週間は開花が遅れるのかもしれない。

パパからユーキに記事を書くにあたって「5 W 1 Hを覚えなさい」という指示がケータイ記者にとんできた。パパは楽観的。ユーキがこれからは、ばんばんトップ記事を書いてくるとみこんでそういうことを言ってくるわけだ。

5 W 1 Hとはニュース記事の基本要素で、「誰が (WHO)」「何を (WHAT)」「いつ (WHEN)」「どこで (WHERE)」「なぜ (WHY)」「どうやって (HOW)」だ。太はユーキに、これを覚えて記事を書きなさい、と自慢げに教える。ユーキはそんなこと言われてもできるだろうかと案じている。

ユーキは、このところ地元新聞の『三の国新聞』を熱心に読み始めている。どんな風に記事が書かれているのか、ユーキなりに勉強をはじめた。自分だったらどういう記事になるのだろうか？ こんなことは書けないなあとか感じながらも読み進めていた。十六ページのその新聞は、一面は大きな全国的な話題が多く、中に入って

いくにつれて専門的・解説的な話題、後ろからめくって社会面となっていた。ユーキは、興味を次第に持ち始める。特に社会面は地元のユニークな記事が多い。

例えば、動物園のヤギが一日郵便局長で、手紙の配達に同行して、「ハイ、『メエ〜』ル」という見出しの写真中心の記事なんか笑えた。

パパからはさらに、記事を書いたら「仮見出し」を作るように指示を受けている。パパが見出しを付けるのに参考にするからということだ。パパは力説する。

「新聞社では、整理部が見出しを考えるけど、書いた記者も見出しを考えるんだよ」

指折り数え、八文字から十文字くらいで記事の見出しを考えるように、と付け加えた。そして、見出しを考える際に役立つのは、新聞の見出しの部分を隠して記事を読んで、見出しを連想してみるという練習をすることをすすめられた。実践してみてわかるが、これが難しい、見当はずれな感じになる。ユーキは難しいなあ、とつぶやいていた。

一方、ママは三月号のレシピに頭を悩ませていた。ことあるごとに、「何かないかしらねえ」、と独り言を言っている。スーパーに行き、インターネットでも探し

ていた。

ユーキはユーキで、今月号からは、なんとかトップ記事を、と思いながらも降ってわいてくれるわけでもなくどうしようもない感じでした。とにかく町内をぶらついてみることから始めようと思い、自転車を転がすことにした。

「何かないかな」

物色する。何も無い。当たり前である。行けども行けども何も無い。商店街は人が少ない。もっと子ども受けする施設があればいいのに。ゲーセンや休憩所にガチャガチャを置いたり、おしゃべりスペースなんかあれば、僕らが集えるのになあ、でも友達いないか、てへっ、などと思いつながらチャリンコをこいでいた。道端では野犬がふらりと通ったり、歩きたばこのおじさんや買い物帰りのおばちゃん、学生などしか目に入らなかつた。あきらめて家に帰ろうか迷ったが、ふと本屋に立ち寄ることを思いついた。本屋に行けば何かあるかなと直感でユーキは思った。新刊のおもしろい児童書に出合えたら、最悪、読書感想文にしてしまえ、というような勢いであった。自転車の向きを変えて東へと進路をとった。

本屋の近くの交差点まできたところで、自転車に異変が起きた。

道路を渡り、右に自転車に向いた時だった。

「ガラガラガツチャンガツチャン」

最初は、何が起きたのか分からなかった。自転車をおりてみると、チェーンが外れていた。それもそうとうチェーンがうねうねしている。これおおがかりだな、困った、とユーキは思った。ユーキはこういう大きなメカには弱い。

まあ、とにかくなんとかしなきゃ、とあれこれ手探りで元に戻そうとするが、なかなかうまくいかない。チェーンで手が油まみれになる。十分以上の格闘に根をあげそうになっていた。

「あー、うまくいかなあい」

その時だった。

「あれえ、ユーキ君かい？ どうしたの？」

ふとみると、クラスメートのこうちゃんがチャリンコで通りかかった。

ユーキはどぎまぎした。こうちゃんとはあまり話したことはなかった。頭がよくてクラスの人気者だ。事情を思い切って話してみる。

「いやね、チャリンコのチェーンが外れたんだよ」



少し思案するこうちゃん。

「ちよつと触らせて」

そういうと、ユーキのチャリンコのチェーンを触り始めた。

ユーキのメガネが反応した。とっさに、「これは！」と思い、ぬめぬめの手をズボンでぬぐいケータイを出す。

予感は当たった。

みるみるうちに、うねうねしていたチェーンがまっすぐになり、元に収まった。あつという間に元通りになる。

「すごい、こうちゃん」とユーキは思わず声を上げた。親しみを込めて、「こうちゃん」と呼んでいた。

「いやあ、それほどでも」と油まみれのこうちゃんも少し達成感からかうれしそうだ。

間髪入れずに、ユーキが問う。

「こうちゃん、これネタにしてもいい？」

「なんだい、ネタって」

「家族新聞を作っていて、いいネタを探していたんだよ」

「よくわかんないけど、まあいいよ」

写メを数枚撮った。現場近くのこうちゃんの家で手を入念に洗って別れた。何度もお礼を言ってる。

意気揚々（ようよう）とユーキは帰宅の途に着く。

ユーキは、本屋へは行かずに、家でメールをさくさくと打ち始めた。

「三月〇日、ユーキのチェーンが複雑に絡み合い壊れた自転車を、友達のこうちゃんが見事に元通りにした」と一文を打つ。それからもノリノリだ。

「ユーキが本屋に行く途中の出来事だった。偶然、クラスメートのこうちゃんがやってきた。こうちゃんはすごいスピードで、ユーキの外れたチェーンをまっすぐにした。その間、五分とかからなかった。ユーキが十分以上格闘していたことに比べれば、本当にてきぱきとあっという間の出来事だった……」。入念に書いた記事を読み返して、こうちゃんが自転車に触れている写真とともにパパに送信した。5 W I H も押さえた。

パパはこのメールをとっても喜んだ。ユーキが自分の言いつけ通りに仮見出しをつ

けて、5 W 1 Hの入った記事とピンボケしていない写真を送ってきたからだ。久しぶりにユーキに興奮して電話した。

「よくやったね。できるじゃあないか」、と。

三月号は「ユーキの救世主現る」のタイトル、「こうちゃんチャリ直す／ユーキはほっとひと安心」の縦見出しで、見事トップ記事を飾った。こうちゃんが自転車を触る姿が大きく掲載されていた。仮見出しも採用された。ユーキは初めてのことにものすごくうれしくなった。

ママのレシピコーナーは、菜の花のおひたしだった。菜の花をゆでて、だしじょうゆをかけるだけという、パパでも簡単なもの。紙面上には、パパが実際調理した写真と感想が載っていた。

後日、こうちゃんの家にお礼に行ったときに、『山田家新聞』を持って行った。これからこうちゃんの家にも配布されることになる。友達になったこうちゃんは、「照れるなく、はずかしいな。当然なことをしただけ」と言いながら、まんざらでもなさそうだった。

三月二十三日はパパの誕生日だ。ユーキはママと一緒に、ずんぐりしたパパのために体脂肪率を下げるお茶と禁煙パイポを贈った。パパは一日に三箱もたばこを吸うヘビースモーカーなので、「助かるよ」とお礼を言った。「体脂肪茶もね」と付け加えた。

四月号 ジョン、危機一髪

四月が来た。新緑の季節がここ、三の国市にもやってきた。ユーキは六年生になる。二組に入った。それだけでニュースになりそうだが、パパからは、もう一本事を書くように指示が飛んでいた。もはや、新聞社の取材指示を出すデスクと下端記者の関係。パパからのリクエストにこたえられるかはユーキは疑問だったが、やるしかないと腹を決めた。もうゲームは頭には完全じゃない。もっぱら友達を増やすことや知らない人に話をするのがどうやったらうまくなるかに焦点はうつっていた。

二月に初取材でタケル建設の不動産部長の名刺をもらってから、なんとなく少しずつ考えていたユーキは、思い立つ。

「僕も名刺を持たなきゃな、記者なんだし」と独り言をもらす。だが、金はない。工夫しよう、とユーキはアイデアを考える。

文房具屋で厚紙を買ってきて、線を引いて手頃な大きさにして、ハサミでジャキジャキと名刺サイズに切る。「『山田家新聞』ケータイ記者 山田ユーキ」とマジッ

クとペンで色もつけて、メールアドレスを入れておいた。これで取材の時に渡せると誇らしげにママに見せた。

「どうこれ？ かつこよくない？」

「いいわねえ、やる気になってるわ。素晴らしいわ」とママ。

ちょっとした事件が起きた。隣の奈村（なむら）町にあるお寺にママと桜を見に行くことにしていた。そのときのことである。ママは二人分の弁当を作って、電車に乗って行くことにした。ユーキは、最寄り駅で四百八十円分の切符を買った後、自動販売機でお茶を二本買った。電車で三十分かけて奈村駅に着いたのだが、電車を降りようとしたときに切符がないことに気づいた。

「ユーキ、どうしたの？」とママが聞く。

「切符がなくなった。どこにもない。どうしよう」とユーキはあわてる。

「どこかにあるわよ。よく探してみなさい」

「ないんだよ。困ったなあ」

そうこうして話していたがママが、「しょうがないわねえ、またお金を払いま

しよう。改札へ行くわよ」と促した。

改札で、背の高い駅員さんに事情を話すママに、駅員さんは何か思いついたように落ち着いた雰囲気ですりかける。

「お待ちくださいね。三の国駅で落とされたのかもしれないね」

そそくさと電話をどこかにかけて、数分してからまた落ち着いた口調でいう。

「午前八時二十六分を買われた切符が、三の国駅の自動販売機の横に落ちていました。ですので、それが紛失された切符ということでしょう。どうぞお通りください」

「どうもありがとうございました」とママ。

「どうもありがとうございます」とユーキはほっとした。

この「少しほっとする事件」があつてから、ママとユーキは桜を眺めながら弁当を食べた。

六年二組でユーキは、なおちゃんという大柄な男の子と友達になった。席が隣でよく話すようになった。なおちゃんは、おしゃべり好きである。趣味は貯金と飼っ

ているカメ。もっぱらその話だ。ユーキは早速名刺を渡してみた。でも、なおちゃんは「へえ」というばかりで反応はいまいちだった。

「家（うち）のジヨンはこれがかわいいんだよ。甲羅（こうら）の筋とか」「へえ」とユーキはそのかわいさがわからない。

しかし数日経って、なおちゃんが暗い顔をして学校に登校してきた。

「どうしたの？」と聞くと、「今朝ジヨンがいなくなったんだ、水槽（そう）からどこに行っただらうか」とおおざめている。

ユーキは少し考えて、提案する。

「じゃあさあ、今日学校が終わったら探してみようよ。手伝うよ」

「ありがとう。でも、みつかるかなあ」と心配顔のなおちゃんだった。

放課後、なおちゃんが住む市営住宅へ向かった。「ここらあたりにいないだろうか？」と、なおちゃんは自宅のバルコニーの真下あたりを指さして、ユーキに言う。そこは背丈（たけ）くらいの草が生い茂っていて、手入れがなされていないところだった。一階には人が住んでいない。「まあ、とにかく探してみようよ」と、二人でジヨンを探し始めた。



「ジョンやーい」

「どこにいるんだーい」ー。なかなかみつからない。草むらの茂みは二人を邪魔した。その中をかき分けて二人は探す。

一時間ほどして、「もう無理か」というときに、もぞもぞと草をかきわけて動く二十センチほどのカメがいた。ユーキのメガネの視界に発見した。

「あれだ！」

ユーキは、思わずケータイを取り出す。記者魂が注入されたのだろうか。なおちゃんに声をかけ、確かめた。ジョンだった。自慢の甲羅が少し割れていた。やはり、水槽から逃げて、四階から落下したようだ。

「ジョンー！」

なおちゃんは両手でジョンを持ち上げて、泣いて喜んだ。ジョンへの愛情が半端ないことがユーキにはわかった。そして写メを撮る。

これが今月号のトップだ、とユーキは直感した。なおちゃんに「これ、ネタにしていい？」と聞くと、「ああ、これを取材するわけ？」となんとなく名刺のことを思い出したようだ。変な記事にしないから、と説明して納得してもらった。

なおちゃんの家から帰ってきたユーキはすぐに記事をメールしはじめた。「ユーキの新しい二組の友達なおちゃんは四月〇日、飼育するカメのジョンが逃げたのを探し、見つけ出した。ジョンはこうらが少し割れていた。なおちゃんは『見つかったよかった』と涙ぐんでいた」と打った。失踪（しっそう）の搜索の模様などを付け加えて、大切にジョンを抱くなおちゃんの写真とともに、パパへと送信した。

パパからは、「ユーキもよくやったね」と褒められ、四月号トップは完成した。

タイトルは、横見出しに「友のカメ、ジョンを救う」。縦の見出しに「ユーキとなおちゃん探す」と付いた。サブの記事は、「駅員さんに助けられる」の見出しで掲載された。「四月〇日、ママとユーキは奈村町の元条（げんじょう）寺に桜を見に行った。道中、切符を落とすアクシデントがあったが、駅員さんの機転で改札を無事に通ることができ、桜を満喫できた」と書かれた。

ママのコラムは、「春キャベツのベーコン炒め」だ。ママは「春キャベツは、冬のと違って葉が柔らかい」と解説した。

後日、こうちゃんとなおちゃんに新聞を渡した。こうちゃんとはクラスは離れたが仲は依然よい。こうちゃんが、「駅員さんも、なおちゃんの記事もよかった」と

いうと、なおちゃんは、「ありがとう。ジョンはあれから元気だよ。でもこの新聞  
恥ずかしいな」と感想を述べた。

ユーキは少しずつ新聞というものが、出来上がっていくことが楽しみになってき  
た。書き方は、少しずつコツをつかみつつあるものの、パパが毎月こしらえる新聞  
は、パパがパソコンソフトを使って作り上げる。まるで『三の国新聞』のように  
ばっちりかつこいい。どうやって作りのだろうか？ 今度は作り方に興味をユーキ  
は持つ。パパに連絡してみた。するとパパはうれしそうにいろいろ教えてくれた。

「いいか、『山田家新聞』の場合は、A4一枚の紙面は六段三十八行ある。一段に  
は十二文字入っているね。これを、記事と見出し、写真で埋めているわけだ。トッ  
プ記事の見出しは横の見出しと縦の見出しで構成することが多いだろう？ 縦の見  
出しは基本は二本ある。ユーキの仮見出しも参考にして作っているよ。右の主見  
出しは七文字から九文字、左の袖（そで）見出しという第二の見出しは九文字から十  
一文字にするとかっこうがいいんだよ。この見出しが互い違いになっているのを千  
鳥（ちどり）というよ」

パパは止まらない。ユーキが新聞に興味を持ってくれたのがたまらなくうれしいのだ。

「それと紙面を作るのに気をつけなければならないルールがある。それは両垂（りようだ）れさ。両垂れとは、記事が上の段落から下の段落に下りるわけだけど、左右の別の記事両方から読めるのはNG。読んでいて混乱するからね。それから腹切（はらき）り。これは、段に引いてある罫（けい）線が紙面全体まで一直線になることさ。あと泣き別れ。上の段の記事と下の段の記事が改行によってつながっていないように読めることなんだ。これらは、コンピューターで新聞を作る前に行っていた、活字を鉛（なまり）で一文字ずつ選んで型にはめこんで作っていたことに依（よ）るんだよ」

あつ熱弁しちゃった工へ、とパパは実況中継してくれた。

五月号 アンハッピーなミユキさん

ユーキは、今月からコンタクトにしてイメチェンをした。見た目から明るくなった印象である。

二日はママの誕生日。ママの提案でユーキは一日付き合うことにした。一年に一回は「母親業」を休みたいようである。とはいえ、ユーキはまだ小六だ。大人らしいことはできない。そこで、ランチをママのアイデアで、パスタ屋に行くことにして、その後でちゃっかりユーキは、地域情報誌に載っていて、かねてから行きたかったジューズ百分百が売りの「ハッピージューズ三の国店」に行くことを提案した。この店の看板犬のノンノンとクマにも会いたかった。

ランチをすませて、「ハッピージューズ」へ向かった。ユーキは早くグレープジュースが飲みたかった。果汁百分百のグレープジュースが楽しみで仕方なかった。ママはまんまとはめられた、といった感じで付き合うことにした。なんか祝ってもらう立場が逆転してなあい？ とユーキに笑ってみせた。

「ハッピージュース」につくと、カラフルでちょっと少女チックな小さな店だった。かわいらしいコップや、色とりどりの花であふれている。しかしなんと味が売りの店だ。店の外には看板犬のクマだけがいた。しかし、なんだか情報誌に載っていたクマと違いやせ細っていた。それも少し気にはなっていた。応対してくれた二十代のミュキ店長はこの店を一人で切り盛りしているそうだ。席へ通された。

「ユーキ、もしかして女の子趣味だとはねー」とママは意地悪そうに言う。

「うるさいなあ」とユーキはいつもの癖（くせ）で右手の親指と人差し指が、かつてあったメガネのふち辺りに泳ぐ。。

ユーキは店の雰囲気は外からしかみていなかったため、中がこんな風になっているとは思わなかった。ミュキ店長はチェック済みではあった。素敵なお姉さんという印象だった。内装についてはまじか少しミスったかも、と感じながらもグレープジュースを注文する。ママは北国出身らしくアップルジュースをオーダー。

「お待たせしました。グレープジュースとアップルです」

ユーキはありがとう、といいながら少し気になったクマのことを聞いてみた。

「クマねえ、もっとまん丸としていたんだけど。最近急にノンノンが亡くなってしまっ、それ以来ごはんを食べてくれないのよ。困っているんだけどね。あは、こんなこと初めてのお客様にお話することじゃあなかったです。ごめんなさいね」  
少しさみしそうにもみえる元気さだ、とユーキは感じた。ユーキは別れ際にミユキさんに名刺を渡した。

二週間後、またユーキは心配になって、「ハッピージュース」へ様子をたずねに行った。店の外にはクマもいなかった。ということとは……。やはり、ミユキさんはこの前以上に深刻な顔をしていた。

「ミユキさん、あれからどうなったの？」

「ああ、『ケータイ記者さん』ね。えっとね、数日後にクマも亡くなってしまったわ。お互いオス同士でつがいでもないのに、そんなにクマにとってノンノンの死が衝撃的だったのかしら」

ミユキさんは目を遠くにやった。

「あの子たちは私や彼には違つ鳴き声で接していたのよ。不思議だと思わない？」

感慨深げに語る。ミユキさんの話では、最初に飼っていたのはノンノンで、歳はクマより五歳年上。ノンノンは雑種、クマは血統書付き。親せきの家で事情があった飼うことができなくなったクマを引き取ったのが二年前。以来、ノンノンがクマをかいがいしく世話した。食事は分け合い、いつもじゃれて遊んでいたそう。兄弟のようにいつも寄り添う二匹だったということだ。ミユキさんの心の内はどんなものだろう。相次いで愛犬を亡くすとは……。ユークはこのことを思い切ってネタにしてみようと考えた。

「ミユキさん、このことを家族新聞に書いていいですか？」

「いいですよ」とミユキさんは力なく言った。

「クマ、ノンノンを追って亡くなる」の仮見出しではじめた。「五月〇日、三の国市内川町の『ハッピージュース三の国店』の看板犬のノンノンとクマが相次いで亡くなった。〇日にノンノンが散歩中に急に死んだので、クマがそれ以降シヨックでごはんを食べなくなった。数日後にクマは餓死した。ノンノンのことを思って亡くなったと考えられる……」と続けた。

このニュースをみたパパは、こんなことがあるのか、と驚いていた。「クマはノ



ンノン思いだったんだね」とメールしてきた。後日、この紙面をミユキさんに持っていくと、

「いい供養になったわ。ありがとう。ユーキ君」

ユーキは複雑な気持ちで店内に飾られた遺影に手を合わせた。これ以降、この店にも『山田家新聞』を届けることになった。これが後であんなことになるなんて……。

ママのレシピは、ゴボウのゴマ酢和え。ゴボウは、皮を包丁の背でこそぎ落とす切ってから水にさらし、あくを抜くのが難しかった、とパパ。ママは旬にこだわった。

今月は命の大切さを知ったユーキであった。



六月号 おばあちゃんの魔法の手

六月のとある土曜日、ユーキは三月にできたばかりのスカイタワーに上った。展望台までは五百円。三の国の町が一望できた。また完全には見えないが、快晴なら元条寺がある奈村町や港大橋がある元根市、おじいちゃんが住む高畑（たかはた）町、さらには遠井（とおい）市や和合（わごう）市の一部まで見える。以前取材した工事のおじさんに聞いた話が今では懐かしく感じるユーキだった。

月曜日に学校に行くと、こうちゃんから映画の試写会に当たったから一緒に観に行かないか、といううれしい誘いがあった。「ワンダフル・アドベンチャー」というタイトルは、冒険もので楽しそうできうきした。楽しくその日にこうちゃんと観た。

これはネタになると、ユーキは寝る前に感想を書き留（と）めてから寝ることにした。

梅雨に入ってムシムシする日が続く。次第に不機嫌になる季節である。家では部屋のエアコンはドライにするに限るわ、とママはいつも毎年同じことを言う。ユー

キはそんな中、ネタをとってくる、と家を出た。ママはこのところのユーキの積極さに、あんなに活発になっちゃって、とうれしそうに部屋でうだっていた。

「図書館に行こう。何かネタがあるかも」

図書館には本がたくさんある。新聞もたくさんある。どんな人がどんな本を借りるのか、読んでいるか調べてみても面白いかもと、ユーキはカンを働かせていた。

途中のバス停で、あるおばあちゃんに呼び止められた。

「ちよっとすみません、おたずねしてもよろしいですか？ サムライ電機に行きたいのですが、どう行けばよろしいでしょうか？」

「ここを真つすぐ行って右に曲がったところですよ」

ユーキは指さすが、おばあちゃんはこちらを向かない。あれっと思うと、おばあちゃんは、杖をあちこち指していた。ああ、目が不自由なんだ、とユーキは分かった。

「ご案内します」

「すみませんねえ」

手が触れる。おばあちゃんは何かに気づいたようにユーキに話しかける。

「あなたはもつと牛乳を飲んだ方がよいかもねえ」

ユーキは、どきっとした。何で背が低いことがわかるんだろう……、と。

おばあちゃんは道中、喋りっぱなしだった。

「あなたは将来偉い人になれるわ。でも無理はしてはだめよ」

「頑張りすぎるのもよくないの。人生上りもあれば下りもあるの。逆らっちゃあだめよ」

とうとうと話すうちにサムライ電機にたどり着いた。おばあちゃんのいうことを信じようと思えるほど不思議に素直になれた。ハツカ味の飴（あめ）を五個もらった。これはいい事をしたし、ネタになると感じたユーキは、年齢と名前となぜ目が不自由になったのかを聞いた。写真も撮らせてもらう。名刺を渡そうとしたが、目が不自由なら渡しても意味がないかなあ、と思いつながら渡す。ユーキはなんだか、変な感じになった。

家に帰り、記事をポチポチと一字打ったたびに鳴る音に気もつかないまま、ケータイに打ち始める。

「六月〇日、道端で出会った、目が不自由な中山芳子さん（八九）を、目的地のサ

ムライ電機に案内した。中山さんは三十代で原因不明で両目が見えなくなった。以来辛い日々を送ってきたが、もう慣れっこだと話す。その代わり、手の感覚が鋭く、触っただけで体形がわかるし、どんな精神状態かもわかる、と……」

数日後、パパが作った紙面では、「目が不自由なおばあちゃんをエスコート」の横見出しに「ユーキ感謝される」の縦見出し。パパに「年齢を聞くんなんて大した進歩だね」と後で褒められた。『三の国新聞』の記事を真似してみたユーキは「やったぜ」と小さくガッツポーズ。サブ記事は「こうちゃん試写会あたる」の見出しで続く。こうちゃんや、なおちゃんたちにも新聞を配った。こうちゃんからは「試写会の記事の感想がよかった」と褒（ほ）めてくれ、なおちゃんは「その映画観に行こうかな」とうらやましがられた。

ママのコラムは、ラッキョウのベーコン炒め。ラッキョウを薄くスライスしてベーコンと炒めるお手軽メニューだ。ラッキョウは漬けるものとはかり思っていただけに新鮮だ、と太は驚いていた。

ちなみにユーキは、耳が不自由な人にも今月は偶然出会った。耳と口が不自由な

今野次郎さんと出会ったのは三の国駅前だった。ママを待っていたら、今野さんは、ユーキに手話で語りかけてきた。両手で人差し指を曲げてあいさつしてきた。

「こんにちは」

かすかに声も聞こえたが、よくわからなかったので、今野さんの手話を真似すると今野さんはとても喜んだ。それ以降は、メモ用紙を取り出して筆談をした。市外から来て、スサノオデパートへの行き方が分からないというので教えてあげた。今野さんは生まれつき耳が不自由だということが次第にわかった。筆談で趣味のことなどを聞いた。今月は不思議な出会いが続いた。障がいがあっても共に生きていける社会になるべきだとユーキは思った。





七月号 マーサの占い

七月一日朝。ママが朝食の時にぽつりとゆで卵を食べながら、

「ユーキ、今月は気をつけなさいよ」

「なんでママ？」

「今朝の『マーサの占い』で今月は九月生まれであなたの年は要注意月だって。見てごらん。これよく当たるのよ」

なになに、と『二の国新聞』のテレビ欄の下にある占いを見た。

（九月生まれは今月要注意！ 特に面倒なことが集中して起こる可能性があります。最悪なのは〇×年生まれのあなた）

「ゲッ、僕の生まれた年じゃん」

「ほらね」

「そんなこと信じないよお。もう変なママ」

そんなことがありながらも、別の日の暑い日の午前。ユーキは歯医者に行つて虫

歯の治療をした。そこからが悲劇だった。財布を落とした。三千二百円も入っていた。どこで落としたかもわからないまま、港大橋まで自転車で行った。気晴らしに隣の元根（もとね）市に渡るうとしたら通行料の三十円がなく、所持金がポケットに十円で引き返すことになった。それだけでない。道中で、でこぼこ道を通っていたら、前日の雨のせいで水たまりが多くあり、隣を勢いよく車が通り、「ぼっしゃーん」と水しぶきを浴びて、下半身がびしょびしょに濡れた。ついてない、とユーキは思った。さらに交差点で信号待ちをしていたら、高校生にいきなり絡まれた。「今ガンをつけていただろうが」と、すごい剣幕（けんまく）。ビビっていると、平手打ちされて、あつという間に、立ち去られてしまった。ユーキは左ほおを痛めた。ネタを求めてあちこち目を凝らして信号待ちしていたのを勘違いされたのか？ 何もしていないのになんて日だ、と思った。まるで正子が言っていた占いのとおりではないか、ん、そうだ、これをネタにしよう！ とユーキはなぜかひらめいた。

家に帰ってメールする。「七月〇日、三の国市内でさんざんな目にあった。財布を落とし、所持金不足で港大橋を渡れず、でこぼこ道で車に水しぶきを浴びた。県

道玉原交差点で高校生にいんねんをつけられた……」と続く。

現場の写真はないので、ユーキはまだはれた左ほおを自撮りした。

パパに「ついてなかったな」と言われた。その見出しに「ユーキ一連の不運／所持金不足で橋渡れず」「車に水しぶき浴び、高校生からは因縁」とパパは仕上げた。ママのコラムは、オクラに納豆、キュウリを入れた「特製ねばねばごはん」。精をつけてほしいという願いだった。

今月はハプニング系の記事であった。恐るべし『マーサの占い』。

ネタにはしなかったが、学校でこんなことがあった。六年生になって友達になった佐藤君がじめられていたことがわかった。しかし、それに対抗したという話。佐藤君は野球少年団に入っている。その中にいる蛭名君に目をつけられた。補欠同士はポジション争いをしていた。ある練習試合でたまにめぐってきたチャンスに佐藤君が代打で選ばれた。それが蛭名君は気にいらなかったらしい。部室でスパイクを盗んだり、ボールをぶつけたりしていた。佐藤君は耐えた。ある日に、部室でついに蛭名君が佐藤君を一発殴った。そうした時について佐藤君が抵抗して、

大げんかになった。みんなが止めて収まりそれ以来はいじめはなくなった。その後で佐藤君が「実は……」と話してくれた。「ユーキ君に話すと、新聞に載るかもと思っただけだったよ」とお茶目にウインクしてきた。ユーキも有名人になった。

八月号　うようよするやつら

夏休み真つただ中。連日三十五度を超える猛暑日。山田家のアサガオは元氣よく咲いていた。パパは夏風邪を引いたらしい。エアコンを二十度くらいに設定しておなかを出して寝てしまったそうだ。今は回復してきているらしい。あまりに暑いので、ユーキはこうちゃんとなおちゃんに声をかけて元根市の港大橋を渡った先にある海岸に泳ぎに行くことにした。もちろん港大橋を渡る往復の六十円を持っていた。

バシャバシャと海水を浴びながら泳いだ。「気持ちいいねえ」と三人。

すると、こうちゃんが浅瀬で足下を探っていたら、

「こんな貝が出てきたよ」と楢円（だえん）形のいい形の貝を僕らに見せた。

すると、なおちゃんが、「それおいしそうだね。持って帰ろうか」と足下を探り出し、「僕もあった!」といった。ユーキもいくつかみつけて三人で十五個の貝を拾い上げた。

そして帰ろうとして、着替えているとふと看板があることに気づいて読み上げて

みると、

「このあたり、ハマグリ（ハマグリ）の養殖をしています。とらないでください！元根漁協」  
と書いてあったので、「やばいやばい」とあわてて三人で海に戻しに行つて笑いあつた。こうちゃんは特にばちが当たつたのか、途中で一回チャリンコで狭い道でこけた。

そんな、なんちゃってな出来事があつたが、今ユーキが一番気にかけているのが、夏休みの自由課題だつた。何にも浮かんでこないのだ。そろそろ始めないと間に合わない。こうちゃんは、コンピューターのプログラミングでなんだかかんだかを作るとかいつていたし、なおちゃんは、ジヨンの観察日記にするとつていた。いいなあ、とユーキはエアコンの効いた部屋でぶつぶつ言いながら考えていた。

部屋を出ると、ぶおーんぶおーんと、ママが掃除機でくまなくリビングをきれいにしていた。そしてユーキに問いかける。

「あら、ユーキ。なんだか最近足がかゆいのよね。部屋が汚いのかしらね？」  
そういえば、ユーキも思い当たる。なんだか足を蚊じゃあないものにかまれてい

るようなのだ。かゆくてかゆくてかきまくっていたら皮膚が赤くなってきた。

「そうだね。なんか蚊じゃあないみたいだね。パパに聞いてみようか」

パパに早速メールした。

しばらくして返信。

「ユーキ記者へ、私の部屋の顕微鏡（けんびきよう）を使って、部屋のを観察してごらん。そうしたらたぶん何かみつかるかもよ。私は任務に戻る。以上」

「なんじゃそりゃあ？」とユーキは思ったが、太の指摘が正しいことに気づくことになるのだ。

ママとインターネットで、部屋にいるかゆいやつを探せ、というような検索の仕方から次第に絞りこんでいくと、正体が「ダニ」ではないか、という疑問がわいてきた。そうか、それで顕微鏡で観察かあ、とユーキは納得をした。

早速、考えついたのが、掃除機の継ぎ目に網の細かいものをはさんで吸引して、それを顕微鏡でみてみようというアイデアであった。

ユーキは、ダニについて図鑑などでいろいろ調べ始めた。ママはユーキがどんな何かしていく姿をみて微笑ましく思ったのか、うれしそうにしていた。鼻歌なん

か歌ってレシピのメモを作っている。

「これがイエダニ、これがマダニ、それがツメダニ。えー、人が死ぬダニなんかもいるんだあ」

これは一大事と、早速掃除機でほこりが多そうな場所に掃除機をあてて吸引した。それから太の部屋にある顕微鏡を持ち出した。さすがに研究者のパパの私物だ。高価そうな顕微鏡で学校の理科室に置いてあるものと違う重厚感を感じた。

顕微鏡を直射日光の当たらない明るい場所に置き、反射鏡を調整してプレパラートを用意、ほこりをのせてピントを合わせる。倍率も気にする、といった手順に従い恐る恐るダニを探すユーキ。繊維（せんい）だらけの中で何が見えるだろうとどきどきとする。

まもなく、クワガタみたいな角をもつダニを発見した。しかも結構いるではないか！

「うわー、これはー。ツメダニだー」

ママが飛んできた。

「何何？ ツメダニってどんなの？」



ユーキが図鑑（ずかん）の付せんを貼っているところを指さしながらも、まだ顕微鏡をのぞく。

「キヤー、こんなのがいるのー？ こわいわー」とママ。

「ほかにもイエダニも確認できるね。動かないのもいるから死んでいるのもいるみたい。でもツメダニだね。かゆみの正体は」

ユーキはすでに研究者気分だ。それに対しママはあたふたあたふた。

「すぐに部屋を業者さんに来てもらってなんとかしてもらわなきゃ」

記事は「八月〇日、家のダニを調べる実験をママとユーキはした。パパの顕微鏡を使い調べると、体を刺すツメダニがうようよいることが分かった。すぐに業者に来てもらい、部屋をきれいにしてもらった……」と書いた。ママのレシピはゴーヤチャンプルだ。体にいいもの、夏らしいものを選んだ。

紙面の見出しは「ツメダニうようよで部屋を洗浄」だった。なんだかかゆさがぶり返すような紙面になった。紙面も夏バテをしている様子だ、とユーキは苦笑した。



九月号 桃太郎がいる子ども食堂

「ユーキ君、今夜『柿久家（かきくけ）』いかない？」

放課後、なおちゃんがダツシユして僕の所にくるなりそう言った。楽しそうに。

「なおちゃん、『柿久家』ってなに？」

「ああ、ユーキ君知らないかあ。月に二回ね、中山のおばあちゃんの家で子ども食堂をやってるの。『柿久家子ども食堂』。百円でおいしいごはんがいっぱい食べられるよ。うちはさ、お母さんが働いているから、夕ご飯がいつもジョンをみながらレンジでチンして食べるだけだから毎回楽しみにしてるんだあ。ユーキ君もおいでよ。記事のネタだっけ？ なんかあるかもよ」。

話をよくよく聞くと中山さんとは以前知り合った目の不自由な中山芳子さんらしい。

「なあるほど、あの中山芳子さんかあ。ちょっとママに話してみるよ」

ママの許しをもらって、ユーキはなおちゃんと「柿久家子ども食堂」に行くことになった。六時に市営住宅でなおちゃんと待ち合わせて、中山という表札がかかっ

た大きな家に行った。玄関を入ると、なおちゃんについて行って、リビングに向かった。数人の子どもと、ごはんを配膳している二、三人のおばちゃんたちと、部屋の隅に揺り椅子（いす）に気持ちよさそうに中山芳子さんがいた。なおちゃんがそのうちの一人のおばちゃんに元気よく話しかける。

「桃おばちゃん、ただいま〜！」

「あら、なおちゃんおかえり〜！！ あれ、今日はお友達連れてきたの〜？」

「うん、ジョンを助けてくれたユーキ君だよ。取材できたんだよ。子ども記者さ。

ごはんも食べていくよ。ユーキ君、この人が桃おばちゃん。『柿久家』の人」

「こんばんは。よろしくお願いしまあす。中山さん、おじゃまします。ユーキです」

桃さんに名刺を差し出す。

「よろしくね、なになに。ケータイ記者？ なんだろ。キミが記者さん？ かわいい記者さんね。なんでもきいていいわよ〜、あつはは」とあつげらかな桃さん。

「あああ、あのユーキ君？ また会えると思ってたわ。あの時はありがとうね。よくきたわね。うれしいわ。牛乳飲んでる？ 楽しんでいってね」一方の中山さん

は再会を喜んでいる。

「ワンワン」

「クウーンクーン」

犬の鳴き声が庭から聞こえる。揺り椅子のおばあちゃんが全然違う方向にいる桃さんに、

「桃ちゃん桃ちゃん、太郎ちゃんが鳴いているわ。散歩の時間よ」と言った。

桃さんがユーキたちに「一緒に少し犬の散歩いこか。少し歩いて、それから食べよう。今日はエビフライよ」とウインクした。桃さんと太郎ちゃん「桃太郎」かあ！ ユーキは思わず、「ぷぷっ」と少しふいた。

ユーキたちは、ダックスフンドの太郎ちゃんと周りを少し散歩してからごはんを食べた。太郎ちゃんはドッグフードを食べている。僕となおちゃんも、大きなエビフライをほおばった。なおちゃんは、エビフライのしっぽを食べた。

「なおちゃん、それ食べるの？」

「当たり前だよ。ユーキ君残すの？ もったいない。いただきます」

「うめえ」

なおちゃんは、ユーキのも食べた。食べた後は、皿をみんなで洗って、それからみんなでカードゲームをして、午後九時には終わった。帰るころには中山さんと太郎ちゃんはなんとなくさみしそうだった。

「また絶対来てね」と桃さんから何べんも言われた。

お世話係の桃さんから子ども食堂とは何か、きっかけは、中山さんの「食卓で子どものわいわいした声が聴きたい」という一言と、地域のお母さんでも夜遅くまで働いている家庭があつて、子どもがさみしい思いでご飯を食べていることなどが一致して、できた活動であることなどを聞いて帰った。

十九日。ユーキの誕生日だ。その日が今月二回目の子ども食堂の日だった。この日は学校でこうちゃんも「今日は子ども食堂と一緒に祝ってあげる」と言われて、三人で子ども食堂に行った。ママは誕生日がにぎやかな方がいいわと先に中山さんの家に行って、料理の手伝いをしに行っていた。

子ども食堂への道すがら、三人の話題は前回のエビフライのしっぽの話から、な

おちゃんの宝くじで一万円当たったことになった。

「やっぱりくじ買うなら、『サムライ電機』のところの売り場に限るんだよねえ」  
「へえ〜」。こうちゃんと僕は感心しきり。

「売り場のお姉さんがね、『なおちゃんは少ないお小遣いで、根気強く毎回、一枚買ってくれるから神様あててあげて』って念を入れてくれたんだよ〜」

「へえ、なあるほど。そんな味方がいたのね」とこうちゃん。

「一万円どうするの?」とユーキが聞くと、「お母さんに内緒のプレゼントさっとなおちゃんはかっこうよくポーズをズバッと決めてみせた。あとはこうちゃん好きなコンピューターの話。プログラミングはわからないよ〜、とユーキ。頭が良すぎるこうちゃんの話は分からない。さすが、チャリンコのチェーンを簡単に元に戻せるし、なんでもできる。いつか偉い人になるだろうな。なおちゃんはお金が好きだから銀行員かな? ユーキは想像を膨(ふく)らませる。」

九月号のトップ記事は、「ユーキが誕生日／子ども食堂でわいわいお祝い」とお祭りモードの紙面になった。写真もみんなでにぎわっている。サブ記事で、「なお

ちゃん、宝くじで一万円／やはり『サムライ』売り場から」でなおちゃんのこと  
載った。ママのコラムはサンマの塩焼き。新サンマの時期でもおいしい。ママ  
もユーキにたくさん食べさせた。



十月号 ハッピーハロウィン

過ごしやすい十月がやってきた。夜空の星も晴れていてよく見える。北極星、オリオン座、

北斗七星。どれも輝いている。夜空を眺めると、自分がどれだけちっぽけな存在かとユーキは思う。

ユーキは、子ども食堂は楽しいので今月もみんなに会いに行こうと思った。そして今月は、「ハッピージュース」のミユキさんを連れて行こうと考えた。それは、みんなミユキさんの店のジュースが好きだから。それにママとミユキさんは話があっているようだ。家でもママがミユキさんの話をして一人で盛り上がっていたので、子ども食堂に誘ってみることにした。毎月、『山田家新聞』も読んでもらいに通っているし、「じゃあ、子ども食堂で食後にジュースタイムをしたらどうか」というわけ。ちょっと考えてみた。それにミユキさんは、犬が好きだから、太郎ちゃんが気に入るかな? と思って話をしに行ってみた。

「ミユキさん、ユーキでえす」

「あつ、いらつしやいユーキ君」

「あれから元気でしたかあ？」

「うんまあね。ああ、『山田家新聞』の評判がいいわよ。先月号なんてよかったわねえ。子ども食堂を取材するなんて。さすが『ケータイ記者』ね。今、全国的に増えてるからニユースよ！」

「ミユキさん、あのね、それでね、その子ども食堂にジュースを作りにきてくれな  
いかなあ？ 中山さんや桃さんも好きだからさ。子どもからの恩返し！」

「えっ私？ ユーキ君は世話をしてくれる大人の人のためのを思っているのかな？  
なかなか気がきくじゃない。そんなことどこで教わったのかしら？」と言ってクス  
クス笑い、少し考えてから、

「そうだね、地域に顔売っておくことも大切だからいいわよ」

「やったー、ありがと。ダックスフンドの太郎ちゃんもいるから楽しめると思う  
よ」

「まったく、最近の小学生は気が回るんだね。誰が子どもで誰が大人かわからない  
わね」と言ってまたクスクス。

子ども食堂の日にミユキさんがやってきた。太郎ちゃんがお出迎え。いつもに増して太郎ちゃんのご機嫌のようだ。初対面のミユキさんに腹ばいになって「遊んで遊んで」のポーズ。これには桃さんも驚いた様子だった。なぜか特別になつている。ミユキさんも仕事である食後のジューズづくりをこしらえながらも太郎ちゃんの様子を気にかけている。その日はなんだかミユキさんはうれしそうだった。ジューズをみんなで飲みながら、桃さんと中山さんがなんだか真剣な話をしているのをミユキさんは気にしているようだった。

「すみません、今月で私終わりになっちゃって……」

「いいのよ桃ちゃん、私もそのうちホームに入るし。今日で一区切りね。ただ太郎ちゃんのことには心配なのよ。あの子はホームに連れて行けないから、それまでは、ね。どうしようかしらね」と中山さん。その日の子ども食堂もにぎやかに終わる。

今月二回目の子ども食堂の日。みんなが集まってわいわいごはんを食べてしばらくして、桃さんが「ちゅうもーく」と言っつて話し始めた。

「みんな、突然ですが、今月中山さんの家での子ども食堂は終わりです。中山さんの家の二年間楽しかったですね。次回からミサト児童館で行います。みんなそっちに来てね」

ある男の子が言う。

「中山さんの家ではもうしないの？」

「そうよ。子ども食堂の活動が三の国市に認められて、児童館でもっと規模を広げることになったのよ」と桃さん。

中山さんは、太郎ちゃんの引き取り先が見つかったら高齢者向け施設に入所することになったと発表もあった。ユーキたちは、残念だなあとつぶやいた。

帰り際にミユキさんが桃さんと中山さんに話しかける。

「あのく、すみません。この間、話を聞いてしまいましたとずっと考えてまして……。彼と相談して、もし私でよければ太郎ちゃんを引き取ります！」とミユキさんが礼儀正しくいう。

「太郎ちゃんと先日と今日と触れ合って、運命を感じたんです。亡くなったノンノンとクマをいい意味で忘れさせてくれると思うんです。私はずっと、あの子たちが

亡くなってから抜け殻のようになってしまいました。もし太郎ちゃんを引き取らせていただけるようなら、一生懸命世話をしますので」

「えー、いいのお？ 助かるわ」と中山さん。一件落着だ。

十月の紙面は、「ミユキさんの『ハッピーハロウィン』／太郎ちゃんを引き取る」の見出しで、ミユキさんと太郎ちゃんの大きな写真と、それから子ども食堂の写真が載った。

ママのレシピはカボチャのカレー。ハロウィンの時期である。種とワタを取ったカボチャを一口大にするのがポイントだ。



十一月号 コスモスを説明してみよう

十一月、過ぎしやすい季節にかわりはない。イチヨウ並木がギンナンを落とし、特なおいが町のメイン通りを占領する。地元の人は朝にギンナンを拾うのが毎年の風景である。朝晩と日中の温度差が激しくなってくる。

月のはじめに高畑町のおじいちゃんの家遊びにママとユーキは行った。海沿いののんびりしたところ。おじいちゃんにサバ釣りを教わった。サビキ釣りという、疑似餌（ぎじえ）を使った釣り。カゴにオキアミをたっぷり入れて投げる。投げ方も教わるユーキだった。こつをつかむのも早く、四十センチ級がばんばん上がり、なかなかの大漁に笑顔が弾けた。その晩の夕食は、サバでみんなでごちそうを食べる。

それから一週間経った日に、目が不自由な人と登山をしよう、とママがユーキに言った。ミサト町内会長さんからのお誘いである。もらってきたチラシに、「コスモスの花が咲き、とても涼しくなってきました。一緒に緑青（りよくせい）山へ行

きませんか？ 障がい者の方と手を取り合いながら景色を楽しみましょう」とあった。

ユーキは、中山芳子さんを思った。高齢者施設へ行ったんだった。来るだろうか？ と。

当日は、午前八時に市の福祉センターに四十人が集まった。大型バスに乗った。車内は県内から集まった視覚障がいを持つ人と各町内会の有志が集まった。

「どんな山かねえ」

「百二十メートルだから景色を楽しみながら登れるねえ」

「私こけないかしらウフフ」

みなさん思い思いに語り、バスは活気にあふれる。中山芳子さんはいなかった。初参加のママとユーキはどんな手伝いができるか、と緊張していた。

「緑青山は、蛭がいたり、植物もホタルカズラやキラソウ、ムラサキサギゴケなどが群生していて、頂上からもいい景色です」と、バスガイドさんが説明する。

二時間ほどかけて、遠井市に入りふもとに着いた。そこで一日共にするパートナーの発表があった。ユーキは田中五郎さんという六十代男性、ママは山本静江さ



んという五十代の女性に決まった。ユーキは田中さんにあいさつの握手をした。田中さんは手慣れた様子で、「三回目になるが、こんな坊ちゃんをはじめてだ、あはは」とうれしそう。ユーキは名刺を渡したが、田中さんは、「わしゃあ、目が見えんから点字の方がいいなあ。あっはっは」と笑う。

「すみません」

「いやいやいいよ。坊ちゃんは点字を知ってるかい？」

点字というのが町や施設にも結構あることを教えてもらう。今度から考えようとユーキは少し理解が進んだ。

登山が始まった。ユーキと田中さんは、輪っかになったひもで手を結び合い、ユーキがリードした。

「こちらは、上り坂が続きますので気をつけてください」と、ユーキはとりあえず無難なことを言った。細かいことがなかなか表現できない。慣れた人は、「五十七センチくらいの段があります」のように的確なことを言う。

ユーキは自信なく言うもので、田中さんは何度も転びかける。だが、「大丈夫大

丈夫」と笑顔だ。ユーキは冷や汗をかく。

一時間ほどかけて全組が頂上に到着する、あいにくの曇り空で視界があまり良くない。田中さんも残念そうだったが満足していた感じをみせる。

ふもとのキャンプ施設まで戻り、みんなで豚汁とごはんを食べた。豚汁は、お世話係が総出で作ったものだった。無農薬野菜をふんだんに使っていた。田中さんはじめみなさんは、手慣れたはしさばきで、すすいごはんを平らげて、豚汁もおかわりを頼む人が多かった。

食後は、自己紹介を兼ねた交流会へ。酸っぱいミカンを食べながら……。

「今日初めて参加しました、和合市の安本です。いつもは家にいるばかりなので運動もしませんが楽しかったです」

「今年の山は楽勝でした」とベテラン参加者。

「景色が説明を受けて想像できました」と二回目の参加者。

ユーキの番が来た。

「今日は、リードが下手で田中さんに迷惑をかけました。次回はもっと頑張りたいです」

田中さんがフォローする。

「いや、サイコーサイコー」と拍手。

周りがどっと笑いに包まれて、拍手が起きる。

交流会が終わり、帰りのバスの中で気疲れからか爆睡してしまうユーキであった。家に帰り、ママと熱気を帯びて、一日の感想を言い合った。このことを記事にすることにした。

「ユーキとママは〇日、ミサト町内会長さんのお誘いで、県内各地から集まった目が不自由な人と登山をした。ユーキは田中五郎さん（六五）、ママは山本静江さん（五八）とペアを組んだ。ひもで手を結び合い、慣れぬ手つきで一緒に歩き、周りの景色を紹介しながら百二十メートルの緑青山を一時間かけて登った。交流会も行った。参加した四十人で山を楽しんだ」と打った。後日、写真担当のボランティアさんから写真をいただいたのでそれを太に送った。

パパは、「二人ともいいことしたね。目が不自由でも外の空気を吸いながら、景色を存分に楽しみたいものなんじゃあないかな」とうれしそうだった。紙面は、「ママとユーキが登山お手伝い」というタイトルになる。ママのレシピは、キノコ

の Pasta。この時期はキノコ類が豊富だ。エノキ、シメジ、マイタケ……。

ミユキさんからメールが来ていた。

「ユキ記者へ。太郎ちゃん元気です。それから、来月あたり何かハッピーで、面白いことがあるかもです。ウフフ」

ユキはウキウキした。それに、来月が終わればパパがプロジェクトから帰ってくる。

十二月号 『山田家新聞』の行方

十二月に入り、寒さが本格化してきた。

そこにうれしいニュースが舞い込む。パパが一カ月早く戻ってくるという。プロジェクトが早く終わったらしい。または家族で年末は過ごせという会社の粋な計らいか？ とにかくユーキは小躍りした。

ユーキはこの一年を振り返る。最初は何を書いていいかわからず課金ゲームにはまってしまったこと、取材も何を聞いたらいいかわからず赤面したこと、次第にピンボケ写真もなおったこと……。思えば、いろんな人たちとの出会いがあった。自分を誇らしく思った。

ある日、『三の国新聞』の記者さんがユーキに取材依頼をしてきた。「ハッピージューズ」の常連で、店に置いてある『山田家新聞』を読んで、訪ねてきた。ミユキさんのメールはこのことだった。まさかのユーキへの取材依頼である。

早速、名刺の交換会からスタートする。

「へえ、ユーキ記者は名刺もきちんと持っているんだね。感心ですね」

「はい、記者のき、き、基本だとおも、おも、思いまあす」と、上ずった声になるユーキ。かなり緊張している。

「ユーキ君、リラックスリラックス。いつも取材しているときのようじゃないよ」「は、は、はいー」

小林秀雄さん（四五）という社会部の記者は、町の面白いネタを探すんだ。ユーキも家にある新聞で小林さんの存在は知っていたから興奮した。

「どうやってネタをみつけるのかな？」

「チャリンコが故障したのをクラスメートが元に直してくれたり、いなくなったカメを見つけたりというところから始めて……ですっ」

「へえ……、そんな偶然なことがあるんだねえ。それはいいネタだねえ。それからユーキ記者は、取材は楽しいですか？」

「最初はゲームをしてしかられて、スカイタワーの工事の取材に行きました。タケル建設の不動産長にお話を聞きましたがちんぷんかんぷんで恥ずかしかったです。その後はだいぶ楽しくなりましたあ」

「ああ、スカイタワーね。ああ、不動産長に会ったんだね。僕も取材しましたよ」

「あ、あの小林さん、『マーサの占い』が良く当たることも結果的にネタになったこともありましたあ」

「ああ、あつはつは。あれね。社内でもみんなチェックしているんだよね」

緊張したユーキは少しずつ慣れてきて返答をしはじめた。「逆取材」は一時間ほどで終わった。ユーキはのどがからからで、冷蔵庫の牛乳をコップで二杯ほどごくごく飲んだ。

ユーキは、取材されるってこんな感じなんだ、と感じてこれがどんな記事や見出しになるんだろう？ と想像をしてみた。

数日後に三の国新聞の社会面に掲載された。『ケータイ記者ユーキ君が町を取材』といった見出しで、小さな囲み記事として。

「三の国市ミサト町に住む山田ユーキ君（一二）は、町のネタを集めて取材し、父親の太さんのバックアップで家族新聞を作っている。母の正子さんも簡単レシピのコーナーを持つ。ユーキ君は時にアクシデント、時にハプニングなどでネタを集める。偶然の出会いなども体験し着実に成長している。『山田家新聞』を毎月待ち望むファンも増え続けている」と書いてあった。写真は、顔がちよっとこわばってし

まっていたが、ユーキは切り抜いて大事に飾った。

ユーキは、高齢者施設にいる中山芳子さんを訪ねた。戦争体験を聞きたかったのだ。そして、それがパパが帰還（きかん）する前に最もふさわしい重たいネタだと感じた。

「あー、ユーキ君、元気かね？ よく来たわねえ」

中山さんは、少しやせたようだった。

「ふんふん、終戦の話が聞きたいのね。わかったわ」

中山さんはゆっくりかみしめながら、思い出しながら話し出す。ユーキはメモをとる。

昭和二十年、八月十四日。第二次大戦終戦前日。

「当時十代半ば。海軍に必要な物を作る軍需（ぐんじゅ）工場で、魚雷（ぎょら）い」という兵器を作っていたわ。そうしたら空襲警報が鳴って、裏山へ逃げたのよ。いったん警報が解除になったので工場に戻って、トイレへ。するとまた米軍の戦闘機がやってきて、松林に隠れている工場めがけて空爆を始めたの。トイレの入



り口にいたので、運よく逃げ出せたわ。必死になって家に戻ったの。多くの人が亡くなったわね。恐怖で数日家に閉じこもっていたので、ラジオもつけず、終戦を告げる天皇陛下の肉声を放送する、玉音（ぎよくおん）放送も聴けなかったわ。数日経って終戦を知り、工場の方では死体を焼く煙が見えたのね……」

ユーキは、ものすごい生々しい話にあぜんとなった。

パパが三の国市に戻ってきたのもこの頃だ。「この一年、よくやったな」とパパ。トップ記事は、もちろん「パパが帰還」。そして「ユーキ、逆取材におどおど」、「中山芳子さんの終戦日記」と続いた。ママのコラムはちゃんこ鍋。白菜、ネギ、キノコ、豚肉をキムチ味で食べるというもの。

パパは、この『山田家新聞』を始めて、ユーキが格段に成長したことをうれしく思っているようだ。ユーキに、「お前の名前はね、勇気を持つ人に育ってほしいという思いの音のユーキに、優しく書くという意味で、『優記』という名前にしたんだ」と言うこと、

「将来、新聞記者になりたいよ、パパ」とユーキ。

「パパもなりたかった。今は違うことが仕事だけど、本当は新聞記者が夢だった。」

ユーキがついでくれればうれしいよ」

パパは感慨深そうにしていたが、ふいにぼそつと言っ。

「来月からどうする？ どうしたい？」

「取材依頼が正月明けからきているんだ。メールにさ。これからも、うんといいい記事書くからさ、B4サイズにしない？」

「待ってましたユーキ」

「じゃあ、ママのコラムは応用編よ」

あっはっは。にぎやかな山田家になった。たくましくなったユーキがいる。夕方から夜になり、ぱっとスカイタワーのライトが灯（とも）って、三の国市を包む。

## エピソード

年が明けて一月に、太に誘われて、優記と正子は東京へ行くことになった。用件はナイショということでハテナな優記だったが、三人で旅行できることを喜んでいった。

遊園地や大きなデパート巡りなどをして一日目は終わった。そして二日目に三人は、大きなビルの会議室に促されて入る。また謎なところへ来たと優記は思ったが、太と正子の二人はうれしそうだ。

会場にいた五十人の前で太はおもむろに、一年間の優記の成長を話しはじめた。優記はいきなり恥ずかしさを覚えた。会場の出席者に『山田家新聞』が配られている。各々に何かコソコソっとしゃべっているようだ。興味しんしんの会場の雰囲気（ふんいき）。

「……我が家の場合は、家族新聞しかないと考えました。最初の頃の優記は、ケータイゲームで約五万円の課金をしてしまい、私のおこづかいが三か月なくなりました」

(アハッ、クスクスと会場から苦笑いの声が漏れる)

「ゲッ、なんだよお」優記は赤くなった。

太は、続ける。

「えへん、しかしながら、彼はその後に無事立ち直り、ケータイ記者として日増しに成長をしてくれましてですね、毎月トップ記事を飾ることができるようになりました、今では家族新聞を作ることが一家の行事として定着しました。ほっとするとともに彼をたくましく感じます。また妻の正子のこと。毎月のレシピ講座で彼女の苦労も知ることができました。その点は、想定外の喜びとなりました。最後にこの企画のおかげでうちの子どもは一年で本当にすくすくと育ってくれました。大変感謝しております。ありがとうございました」

太も興奮で顔を赤らめて会場におじぎをする。そして優記と正子に駆け寄る。  
「とうわけなのだ」太は誇らしげである。

ぽかーんとする優記。

パチパチパチパチ。拍手喝采でみんな笑顔だ。

司会が進む。

「はい、金賞の山田さんでした。次は銀賞の鷺尾（わしお）さん、お願いしまあす。――。会議終了後にスーツ姿や作業着の人たちが、三人の周りにもたくさんの方が集まる。

「優記君はすごいねえ。山田さん、とても面白いですね。うちも見習いたいですよ」ある一人から声がかかる。

「パパ、こんなことだったわけだね？」と優記。

「えへへ、そんなわけなのさ」と太。

三人は会場の人にあいさつをして会場を手をつないで退出した。

会議室の看板に「第一回単身赴任家族の絆（きずな）プロジェクト全国発表大会」とある。

完

奥付

ケータイ記者ユーキ君

二〇二二年十二月二日 発行

著者 天地成行

発行者 みんつど出版

表紙デザイン 安溪遊地

助言 那須正幹